

『文学にあらわれた現代ドイツ — 東西ドイツの成立から統一後まで』

恒川隆男, 平子義雄, 小松英樹, 根本萌騰子, 尾川浩, 大中智男, 若槻敬佐 著
三修社 1997 年

山 田 広 明

戦後 50 年, 20 世紀末を間近にひかえて, この約半世紀の現代ドイツ文学を概観する手引書があればとかねがね願っていましたが, この度それが一部文部省科研費の補助を得て三修社から出版されました。B6 版本文 230 頁, 作家紹介 (20 名) 30 頁, 年表索引 30 頁, 計 290 頁の本です。

「まえがき」にもあるように, 「戦後のドイツの文学は社会や政治との関係をぬきにしては考えられない」という立場から書かれた「現代ドイツ文学史でもあり, また, 文学の視点から見た現代ドイツ史でもある」本書のドイツ語のタイトルは, Deutschland im Spiegel der Gegenwartsliteratur です。従って, 「オーストリア文学については僅かしか, …スイスの文学については何も触れられていない」ことをわざわざことわる必要はないかも知れません。ただ, 「西ドイツに比重がかかりすぎていて, 東ドイツの扱い方はいささか手薄」だという点については, たしかにそうかも知れませんが, むしろ私としては, 東ドイツにこれだけの紙数をあてたことを多とします。

各執筆分担の末尾には, 執筆者名がイニシャルで示されていますが, 1940~43 年生まれのはほぼ同世代に属する息の合った人びとの共著であるためか, 少なくとも私は筆者が変わったことを気にしないで読み通すことができました。

現代を扱う場合, 本ができあがってみたら, 紹介した作家の何人か (例えばユーレク・ベッカーやハイナー・ミュラー) が, その間に亡くなっていたということがよくありますが, 本書の場合は執筆者の中の, それも一番若い世代に属するお一人がお亡くなりだそうで, 痛恨の極み, ご冥福をお祈りいたします。

本書の構成を章別 [頁数] で紹介すると,

- 「序 章 東西ドイツの成立まで (1945~49 年) [11],
- 第 1 章 グルッペ 47 とアテナウアー時代 [13],
- 第 2 章 革新政権の誕生—アンガジュマンと学生運動 [43],
- 第 3 章 ウルブリヒト政権下の東ドイツ [69],
- 第 4 章 現実への新たなアプローチ [89],
- 第 5 章 反核平和を目指して—東西ドイツのイニシアティブ [125],

- 第6章 保守リベラルの復活 [139],
 第7章 ホーネッカー政権下の東ドイツ [171],
 第8章 ドイツ再統一とその後 [197],
 作家紹介 [231], 年表 [261], 人名索引 [286], 事項索引 [290]

となっています。年代が付記されているのは序章だけで、あとはほぼ年代順に章を追っています。ちなみに本書は縦書きで、数字も漢数字が主体です。

例として第1章を取ると、

冒頭で政治、経済、軍事、社会情勢が概観されます（このスタイルは各章同じで、最後の第8章だけが異なるのは執筆者の逝去によるものと推測されます）。ここでは、初代首相アデナウアー（キリスト教民主同盟 CDU）の任期、49～63 年がアデナウアー時代と呼ばれること、エアハルト経済相、戦時補償、経済復興、再軍備、NATO 加盟、共産党 KPD の非合法化、社会民主党 SPD の路線転換＝ゴースベルク綱領などが取りあげられます。

本文は七項目に分けられ、それぞれがさらに（一）、（二）と細目に分けられる場合があります（これは各章最後まで同じスタイルです）。

「一 グルッペ 47,（一）『叫び』誌と占領米軍,（二）グルッペ 47」では、グループの成立と展開が述べられたのち、「【作品紹介】ギュンター・グラス『テルクテの出会い』（79 年）」と見出しが変わって、約 20 年後にグラスが発表した、1647 年の歌人や版元たちの会合を語った虚構の作品によって、グループ 47 の説明を補足するとともに、ドイツ再統一後のグラスの問題意識にまで言及します。この【作品紹介】が本書の特徴でしょう。

「二 ラジオ・ドラマ(放送劇)」は、この時代の流行のジャンルを簡潔にまとめています。（ここでゲーテ、シラーの名がちらっと出てくるのですが、人名索引には欠けています。細かいことですが、あとで述べることと関連します。）

「三 奇跡の経済復興への懐疑,（一）復古主義と作家たち,【作品紹介】ヴォルフガンク・ケッペン『温室』（53 年）,（二）「歯車の中の砂」,（三）「気密な」文学」では、経済繁栄に酔う復古の世相と作家たちとの対立、政治不信を代表するケッペンの『温室』を取りあげ、ドイツの良心役を担わせられる詩人・作家の立場から「世界の歯車の中の、潤滑油でなく砂になろう！」と呼びかけるギュンター・アイヒの詩を引き、最後は、「固く閉ざされた」パウル・ツェラーンの「気密な」詩の意味するものまでが手際よく説明されます。

「四 ハインリヒ・ベルとカトリック教会,（一）「ドイツ的心情」論議,（二）兵役義務について,（三）ベルの教会税不払い宣言」では、いわば宗教的心情と体制の制度と化した宗教との軋轢を、『クリスマスの時だけでなく』（53 年）や『或る若いカトリック教徒への手紙』（58 年）発表当時のいざこざを通して解きあかし、『九時半の玉突き』（59 年）に行きつくことを示します。（ここでも（一）でトーマス・マンの名が出るのですが、人名索引には欠けています。実は第2章,（二）でもゴロー・マンの父としてトーマス・マンの名が出てきます。後述参照）

「五 シュピーゲル事件」は、62年10月、国家軍事機密漏洩を理由とする『シュピーゲル』誌編集局の搜索、逮捕事件が、作家、知識人たちと政府との対決をもたらし、ついにシュトラウス国防相を辞職に追いこむ経緯を述べます。

「六 59年の三つの作品、【作品紹介】ハインリヒ・ベル『九時半の玉突き』、ギュンター・グラス『ブリキの太鼓』、ウーヴェ・ヨーンゾン『ヤーコプについての推測』」では、この年「ドイツ文学が近代文学としての文学的レヴェルを取り戻した」といえる作品が、揃って世に出たことを紹介します。

ここで一つだけ注文もつけておきましょう。『九時半の玉突き』が、半世紀のドイツ現代史を1958年9月6日の朝から晩までの一日の時間帯の中で語ろうとしていることを、次の版ではぜひ一言触れてほしいのです。成否はともかく、ロマンは書けないといわれていた、まだ四十の坂を越えたばかりのベルの気負いを感じますし、このエサに食いつくサカナ(学生)が結構いるものですから。

「七 グルッペ47の解散」で、20年の歳月を経て、このグループがついに1967年に解散することを述べて第1章が閉じられます。従ってあえて年号を入れれば、第1章(1947~67)ということになりますが、限定が困難なので以下の章にも年号はついていません。

章によって異同はありますが、大体こんな調子で以下の各章も展開されます。

本書の特色をきわだたせるために、ここでちょっと寄り道します。

DIE ZEIT, Nr. 22, S. 42, 23. 5. 97に、アビトゥリエントにどんなドイツ語文学作品を読んでもらったらよからうか、というアンケートの結果が載っています。50名の識者に複数回答を求めたようですが、以下に10位までを書き写します(括弧内は票数、／は同数同位)。

1. ゲーテ(28), 2. カフカ(18), 3. トーマス・マン(14), 4. ビューヒナー／ブレヒト(12), 5. シラー／クライスト(11), 6. レッシング(10), 7. ヘルダーリン(9), 8. ハイネ(8), 9. リルケ(7), 10. フォンターネ／ゴットフリート・ベン(6)となっています。

本書の人名索引に載っている詩人・作家では、11位にウーヴェ・ヨーンゾン(5), 12位にツェラーン(4), 13位にトーマス・ベルンハルト(3), そして最後の14位(2)には、W. ケッペン, H. ベル, I. バハマン, P. ヴァイス, A. シュミットが名を連ねます。1票だけ入った人が15位になるわけですが、残念ながら省略されています。

たしかにこのZEITのアンケート結果は、いささか古典的すぎるかもしれませんが、ほぼ大方の予想どおりでしょう。ところが本書の人名索引には、上のアンケート順位1位から10位までの13名のうち、ゲーテ、ブレヒト、ベンの3名しか姿を見せません。

シラーは、大連立時代の経済相カール・シラー(SPD)のことですし、またゲーテは、ブレンツドルフの『若きWのあらたな悩み』との関連においてのみ出てきます。つまり前述の箇所でのゲーテ、シラーは索引に出てこないのです。前述のトーマス・マンも同様に出てきません。さらにカフカも、M. ヴァルザーの作家紹介のところで出てくるのですが、索

引にはありません。どうも偶然こうなったのだとは思えません。

これに反して、最も頻繁に登場する双壁がギュンター・グラスとハインリヒ・ベルであり、次いでマルティン・ヴァルザーとヴォルフ・ピーアマンです。

事項索引の中で頻度の高いのは、アウシュヴィッツ、キリスト教民主同盟、社会民主党、シュタージ、『ビルト』紙、緑の党などです。

これによって本書のおおよその見当がつくのではないのでしょうか。推量するに、皆伐の廃墟からの零発進に、いまさらゲーテ、シラーやマン、カフカでもないだろうという意識が根底にあって、第二次世界大戦後約半世紀のドイツ文学について啓蒙的な手引き書を作ろうとしたのだと思います。そしてその意図は、限られた紙数のなかでも果たされていると言えるでしょう。専ら散文を生業とする私なぞは、本書を通じて説明される現代詩の状況を読んで、すこぶる納得、つまり啓蒙されました。

これまでも戦後のドイツや文学について日本語で書かれた解説や翻訳がなかったわけではなく、それぞれその役割を果たしてきました。ただ、私たちのように第二次世界大戦を生きのびてきた世代の人間には自明の事柄が、若い人たちからは何のことだかわからないと言われた経験が何度かあります。もう少しまとまった手ごろな解説書はないものかと、最初にも書いたとおりかねがね願っていたところに本書とめぐりあい、私としては一息ついたというか、少し気が楽になった感じです。つまりこれは、相手が現代志向の人なら、とにかく一度読んでごらん、どこかにとっかかりが見つかると思うよと推薦できる本だと思います。そして 同時代を生きてきた世代に属する私たちには、本書を一人でも多くの若い人に読んでもらいたいと願うだけでなく、推薦する義務があると感じます。何しろ、ドイツの再統一すら自分たちにとっては歴史の上の出来事だ、という言葉がレポートに出てくる世の中なのですから、本書をきっかけに、そうした若い人たちと話し合い、その疑問なり質問なりに辛抱強く出来るかぎり誠実に答えていく義務が私たちにはあると思うのです。

(1997 秋)